

乱

麦社通信

RAN 4

政治の死について小論

島崎 寛

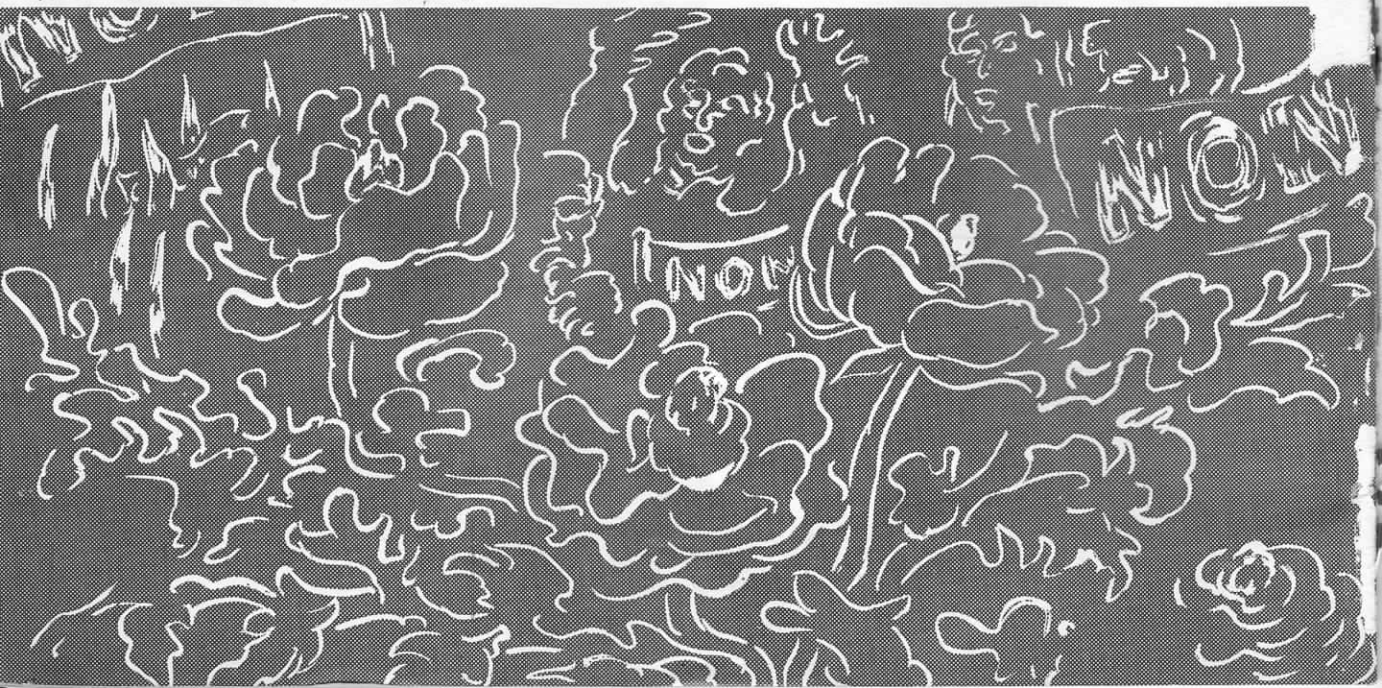
混血の礼讃

大沢 正清

〈政治〉を超える政治闘争を

嵯峨 潤

麦



構造

五月号 一六〇円

■特集

おんな・生・革命

三里塚から

長谷川 たけ

「日赤看学闘争」その総括と中間報告

大宮赤十字看学闘争委

讃・聖母マリア

木村 和子

ラディカル・リヴの革命論

ラディカル・リヴ

小さな火花も荒野を焼き尽す

田中美津

族母的解放の始源

河野 信子

経済構造社

中央区京橋 2-4
Tel (272) 2659

帖の手黒

人間における遊戯と労働(2)

大沢正道

カテキズムへの回帰

内村剛介

文学のアナ・ボル論争(3)

秋山 清

土着の原理

草階俊雄

ブルードンと現代(3)

長谷川進

杜鵑の声

宋世何

スペイン革命におけるCNT(10)

ペイラツ

黒の手帖総目次(一一一〇号)

一一号

一一〇〇円(〒45)

黒の手帖社

東京都新宿区北山伏33(大沢方)
振替東京 102465

政治の死についての小説

島崎 寛

戦後、二五年にわたる議会制民主主義の政治体制のなかで、政治に対する幻影が大衆運動のなかで暴露されてゆき、議会制民主主義の破産はその都度宣告されてきた。こんにち政治が生活を、人間の存在を根底的に変革しえるというオブティミスティックな信仰は既に過去の遺物となつていくようにみえる。ほとんどの人が政治が生活を変えうるということを本気で信じてはいない。にもかかわらず、常に政治の陰が人びとの頭上を覆っており、ぼくらは、生活の問題が政治の言葉で代弁するそうした不愉快な感情に日常しばしば出会う経験を持つてゐる。それは、政治が生活を支配するという幻想がいかに根強く社会に存在しているかを物語っている。これまでのところ、社会変革を目指すどんな運動もこの幻想を打ち破るには至つておらず、革命闘争が、まず政治革命を、という形で展開せざるを得ないか否かの問題は、結局のところ、この幻想を打ち破ることができるかどうかに帰着する。

「政治の幅はつねに生活の幅より狭い。本来生活に支えられているところの政治が、にもかかわらず、屢々、生活を支配しているとひとびとから錯覚されるのは、それが黒い死をもたらす権力をもっているからにほかならない。一瞬の死が百年の生を脅し得る神秘を知つて以来、数千年にわたつて、嘗て一度たりとも、政治がその掌のなかから死を手放したことはない。」『幻視のなかの政治』のなかで埴谷雄高は、生活に寄生虫のようにからみついてくる政治への憎悪をこめてこう述べている。以下、埴谷の政治に対する考察を検証してみよう。彼は政治を、△悪しき実見者▽と△善意の雷同者▽そして△少数の執念に充ちた反対者▽の三つを軸としてその構成をとらえている。△悪しき実見者▽によつて主導される政治の動きは、△善意の雷同者▽の無言の支持と△少数の執念に充ちた反対者▽の圧殺を孕みながら展開する。そして、政治を支える根底を次のように述べている。

「政治を政治たらしめている基本的な支柱は、第一に階級対立、第二に絶えざる現在との関係、第三に自身の知らない他のことのみに関心をもち熱烈に論ずる態度である。自身の知らない他のことを論ずるために、私たちはまず他人の言葉で論ずることに慣れ、次第に、自身の判断を失ってしまうのが通例であるが、この他人の言葉を最も単純化した最後の標識は、さて、ひとつのスローガンの高唱のなかに見出せる。—スローガンを与えよ。この獸は、さながら、自分でその思想を考えつめたかのごとく、そのスローガンをかついで歩いてゆく。—この△他の思考▽がこれまでの政治原理である。

…ところで、そこに扱われる他人なるものがつねに見知らぬほど遠くにあるのとまったく同時に、それ自身もまた新たな他人に対して見知らぬほど遠い他人の位置へまで絶えず移動しつつある」

△悪しき実見者▽を支配者として、△善意の雷同者▽を生活者として考えてみれば、△少数の執念に充ちた反対者▽は革命家としてとらえることができる、△悪しき実見者▽と△善意の雷同者▽でつくられた一つの秩序に、△少数の執念に充ちた反対者▽が挑戦するとき必然的に政治の場における闘いとなる背景には、△他の思考▽が存在する。すなわち、生活において自らのさし迫ったそして自ら解決してゆかなければならない個々の具体的問題は、それが普遍的、抽象的問題にすり替わってゆくときに、政治的に表われてくる。しかし、ここに至って、次のような疑問が生じる。政治は生活に支えられているにもかかわらず、政治が生活を支配するという逆さまの構図はいかようにもしたい我々の宿命であろうか。社会変革の歩みがまず通らなければならぬ第一の関門は政治権力の奪取であろうか。埴谷はこれに対し、正面から答えていない。なぜなら、彼は次のようなところに解決の途を求めているからである。政治が結局のところ権力をめぐる問題であるならば、それは、あれは敵だ、敵を殺せという言葉に帰着する。それがいかなる見せかけの哲学を持とうとも、そして政治は常に幻想を伴うのであるけれども、勝つことがその目的となる。力と力のぶつかりあいである限り、手段は限定されることはない。革命において問題となってくるのは、誰が敵かということである。これまでのところ敵は人間なのであるが、ロシア革命、ハンガリーといった歴史のなかに、敵を人間として捉える認識が誤っていることを裏つける例証を見出すことができる。意識は存在によって規定されるというマルクスによって打ちたてられた唯物論的命題は同時に敵が

味方が変わる、すなわち、人間が可變的であることを証明した。「人間が条件によって可變的であるとの革命的な認識は、まず、固定したかたちの敵を容認しなくなたばかりでなく、一般に人間を敵として設定することをも不可能ならしめたのである。もし与えられた条件が変革されれば、それまで敵と見られたものも敵でなくなってしまうばかりか、味方にさえなるのであって、敵は与えられた条件自体であるというその認識は、ひたすら、人間のみを敵とすることによって冷酷な死と流血を歴史のなかに記録してきたこれまでの政治のかたちに、ひとつの決定的な終止符を与えるまさに革命的な転変なのであった。」

人間から制度へと変わる敵に関する認識は、しかし、彼が自負するほど革命的な転変ではありえない。生活を支配しているという幻想をとる政治も生活のなかにある全てを吸収することはできないのであって、生活の幅は政治の幅よりも常に広い。そして、埴谷が想定した△善意の雷同者▽は政治のなかではそのような構図をとりえても、生活のなかではそのような構図をとることはできない。政治のなかでスタティックな△善意の雷同者▽も、個々の生活のなかでは極めてダイナミックな生活者となるのであって、両者は決定的に違っている。政治のなかでは、一人の名もなき民衆が、日常の生活のなかでは、魚岸の兄ちゃんとして、あるいは旋盤工として、それぞれ家庭を持ち、具体的な個々の生活を営んでいる。そこに、これまでの人類の歴史の歩みがあり、同時に生活が全体性として表出されない人類の悲劇があつて、単純な力の原理に依存する政治が、こうした個々の生活を吸収しえないのは当然であり、政治が生活を完全支配することも断じてありえない。生活の問題が政治課題として登場するとき、それはつねに、△他の思考▽に裏づけられているのであり、それこそ、政治の秘密に他ならない。埴谷が蹟いたのは、政治の幻想を敵はなにかという問題としてとらえようとしたところにある。確かに、人間は条件によって可變的であり、敵である人間も味方に転化する可能性をもつのであるが、そのことに関する認識、すなわち、敵は制度自体にあるとする認識はそれ自体、正しいとしても、政治の幻想を打ち破る論理とはなりえない。政治の幻想を打ち破る原因は、政治が生活を吸収し尽くせないという一点にあるのであって、△他の思考▽こそ、それを解く鍵となる。

これまで、社会変革を志向する運動が政治闘争に収斂していった原因は、政治の幻想に引き摺られ、権力が運動を圧殺するという側面からのみ政治をとらえ、運動

を窮極的に力関係に還元していったことにある。日常における創意がダイナミズムを捨象することを属性とする政治闘争は、その意味でステاتيックである。だから、社会変革の運動の質は必然的に欠落してくる。政治は力関係以外ではありえないからだ。共同体の問題が革命を守れというスローガンに変わっていったとき、ロシア革命やスペイン革命が変質、腐敗していった。

歴史の教訓はもっと尊重されなければならない。我われはもっと運動の質にこだわるべきである。

しかし、次のような反論が出て来るだろう。「確かに運動の質にこだわるのは良いとしても、国家権力は常に運動を圧殺しようとするだろう。そうしたさし迫った国家権力の弾圧にいかに対抗しうるかが問題となるのであって、政治権力をこちらに奪取しない限り、革命の勝利もまたありえない。」この問答は古くから、アナキズムとマルクス主義との間にかわされ、現在まで尾を引いている。しかし、革命の問題は政治権力をめぐる問題ではない。政治権力は革命の一部分の問題である。革命はいかに社会を変革するかにある。だから、問題は次のように設定することができる。社会構造にどれだけの影響を、その根底をどれだけ揺り動かす運動を創出しえるかであって、決して政治における力関係のバランスで秤量することではない。同時にその運動が質的に社会構造を揺さぶることができるときに政治における力のバランスをも揺り動かすことができるからだ。両者の統合のなかで、革命はとらえねばならない。△他の思考▽に側していえば、運動が社会構造に与える影響の深さによって、△他の思考▽すなわち政治をつき破って生活の日常に波をおこすことが可能となる。変革が△他の思考▽から自己の実存においてくるとき、自分のことを自分の言葉で語ることが可能となり、それゆえ、社会変革が政治と生活をトータルに結びつけることをも可能となる。

六八年から六九年にかけての全共闘運動が闘争の高揚期につきあたった壁は、日常のなかに狡猾に忍び込んでいる政治の原理であった。全共闘運動がそれまでの自治会運動や全学連運動の限界をつき破り、新たな運動の質を孕むことができたのは、自己の実存まで垂鉛をおろしえたからであり、それが萌芽のうちに崩壊していったのは政治の原理に対抗しえなかったことによる。その転換点は、全国全共闘を結成した時に一致する。政治闘争に収斂していった時、力関係によって運動が秤量され、運動は手段になってしまふ。現実の運動がトータルな可能性を追求すること

ができるのに対して、政治闘争は窮極的には勝つか負けるかであり、殺れ、殺らなければ殺られるという二者択一の原理に拘束されていて、数を増やすことだけが問題となる。同時に政治を支配するもう一つの原理、強い方が勝つという歴史の流れのなかで微動だにしない力の哲学に例外は存在しない。啓蒙とゲリラという現代の政治武器は、政治の別の武器に、警察、軍隊、政治が△他の思考▽によるものという権力の側のより強力な武器によって殺られる。現代日本において、議会内政党は政治が生活を支配するという幻想に依存することによって、イデオロギー上の幻想を保持しえているにすぎず、新左翼諸党派も政治の原理で自らの首をしめている。人間の全体性は結果ではなく、その過程において実現されていくものであり、アナキズムのこの特徴は、具体的には反国家の思想の深化によって現在に新たな光明を投げかけている。現代社会にひそむ位置の逆転、逆さまな構図が今後、白昼に曝し出されるか、それとも暗闇のなかでぼくらを支配するかは、どれだけ自己の実存に密着しながら、世界的視野を獲得していけるかにかかっている。

注 △他の思考▽の意味を明確にするために、若干の説明を加える。

たとえば、人間の類的存在という言葉を想定してみると、この言葉自体に価値を付与することはできない。類的存在は個々の人間の実存総体を意味しているからであり、実存の価値はないからである。△他の思考▽によって出現する世界は、自分自身、すなわち、思考の主体者がその世界に存在しようとする世界と、主体者を決してそこに見出すことができない世界であり、それゆえ、別の言葉でいえば、自己が他者として表われる自己疎外の一形態である。

混血の礼讃

大沢正道

清ルミという混血の新人歌手が、ある週刊誌で、混血であるゆえに、子供の時から、「サル」とか「黒ん坊」とかののしられ、あざけられ、さげすまれた、とその過去を語っていた。彼女の苦しみは、過去だけでなく、未来に、あるいは生まれてくるかもしれない子供にまでわたっている。生まれてきた子供は、必ず混血だから、彼女がなめてきた屈辱が、ふたたび繰り返されるのではないだろうか、というのだ。

そういえば、いつか泉アキというやはり混血の女性歌手も、少女時代に受けた混血なるがゆえの受難を語っていた。「いまでは、でも、混血であることを感謝しています」——というのは、混血なるがゆえに、逆に、歌手として、タレントとして売出すことができたからだ、と彼女は居直っていた。

敗戦とそれにつづく四分の一世紀を越える占領、という状況のなかで、どのくらいの混血の人口が生みだされたのか、また、それがどういう社会的、政治的問題を生みだしているものか、ぼくは、ごく断片的にしか知らない。また、そう知りたいともおもわない。ぼくが、知的興味をそそられるのは、混血の思想問題である。

林達夫の「思想の運命」というエッセイに、次のようなくだりがある。

「……植物というものは移植によって却って根張りのよくなるもので、山林に自然に生えている樹木よりも苗木商の栽培している樹木の方がどうしても活着もよく樹勢もよい。土着ということはあたかもどっしりと腰の据わっている重厚性と活力との代名詞のように使われる場合もあるが、しかし、あらゆる点ですぐれた植物というものは土着のものよりも新しい地盤に植え替えられたものの方に断然多いことも事実である。だから『良心的な』植木商は必ずこの移植によって、その苗木の優生学に努めている。例えば横浜の有名な某植木商の一九三八年度のカ

タログには、こう書いてある。『弊社栽培樹木は毎年移植を行ない居る故、細根多く遠く海外まで輸送するも枯死する恐れなき優良苗なり。』

自然生えよりも、しかるべき条件になつた移植の植物の方が、種としてあらゆる点ですぐれている、という林の指摘を、そのまま、人間の場合に結びつけるのは、ちと乱暴かもしれない。

だが、かつては、混血によって体質が劣悪化すると信じられたこともたしかにあったが、しかし、現在、形質人類学が到達した結論は、むしろ、その逆になっている。いわゆる雑種強勢の原則は、植物、動物にみられるだけでなく、人類にもおなじように貫徹される。人類の身長が、最近、年とともに延びる傾向にあるのは、食糧事情の向上など、環境の改善によるだけでなく、混血による体質の改善がかんがえられる、とする学者もいるくらいなのだ。

ムラート（白人と黒人の混血）、メステイソ（白人とインディアン人の混血）、ユラシアン（白人とインド人の混血）、アルモーズ（ロシア人と中国人の混血）等々、世界の各地に混血人種が散らばっている。日本では、俗称だがハーフといったところだ。

あるアメリカの社会学者は、彼ら混血人種が、二つの異質な文化を一身に担い、そのどちらか一方にだけ帰属できぬ宿命の持主であるところから、マージナル・マン（周辺人）と名づけた。混血人種がマージナル・マンなら、混血でない人種、こういう言い方があるかどうかは知らぬが、さしずめ純血人種は、セントラル・マン（中心人）とも呼ぶべきであらう。

セントラル・マンの社会で、少数のマージナル・マンが、しばしばさげすみや迫害の対象になるのは、生物学的な、人種的な理由からではない。体質的には、マージナル・マンの方がすぐれこそすれ、劣ることはないからである。理由はむしろ、社会的な、文化的なところにある。混血が、「異質文化の受精」、したがって「既存文化の動揺」をもたらすところにある。セントラル・マンの文化、社会秩序をゆるがすからである。

マージナル・マンになくて、セントラル・マンに根強い意識として、純血の誇りがある。セントラル・マンがマージナル・マンを混血としてさげすむ感情の抛りどころは、この純血の誇りである。純血の誇りは、いまや大幅に平価切下げを迫られている処女の純潔のモラルとおなじで、まったくいわれない、非合理的な感情の

コンプレックスなのだが、その形成の歴史は、じつに階級社会の成立の発端にまでさかのぼることができる。

今日でも、未開社会では一種の靈魂として血液靈が信じられている。いちばんよく見られるのは、血による盟約で、たがいに体に傷をつけ、吹きだしてくる血をすりあったり、こすりあったりして、血をまぜあい、兄弟や同志の契りを結ぶというやつだ。そのほか、血を吸うと力がつくとか、血を流すことで罪を浄めるとか、いろいろな血を主体にした呪術があるが、血による盟約とか血を血で贖う血債などは、なにも未開社会にかぎらない。文明社会でも、ヤクザの仁義から革命運動のジブロにいたるまで、しばしば見受けられるところである。

これらは、未開社会で行なわれている血液靈の遺制にちがいないのだが、しかし、遺制だからといって、人間の進歩とともに、いつかは自然に消滅するもの、とおもってはならない。人間は、いつでも遺制に先祖帰りできるし、また、しょっちゅう、先祖帰りしたがつている動物だということは、しかと心にとどめておいた方がよい。

純血の誇りには、この血液靈の信仰がからみついている。王や豪族が実力で支配権力を手に入れた時、次に彼らが念じたのは、この権力よ、永久に安かれ、という願ひであつた。権力を安きにおくためには、むきだしの実力だけでは足りない。个体としての人間を全体のなかに関係づけ、包み込んでいく超意識を逆手につかつて、影の、あるいは負の超意識で被支配人民を関係づけ、包み込まなくてはならない。

血は、この影の、あるいは負の超意識の核として、かつこの媒体である。もともと、血に靈魂を見るようになったのは、血が生命の表象と目されたからである。影の、あるいは負の超意識の核として、生命を表象する血がすえられれば、それは、ほんものであるかのように、十分錯誤される。しかもその血が、王や豪族など、支配者の一族だけに流れている特別な血、そんなじよそらの人民の体内を流れている血と質を異にする純粋な血ということになれば、この血を核として拡がる超意識は、まちがいがなく彼ら一族の支配権力を安きにおく力として働くであらう。

純血の誇りの起源を種明かしすれば、ざっとこんなものである。それは、その発生から今日にいたるまで、無数のヴァリエーションを作りだしているが、その構造はつねに一定している。つまり、影の、あるいは負の超意識の核——權威を生みだ

し、その権威の下に価値のヒエラルヒーを形成する、このヒエラルヒーを乱すものを異端とし、敵として抑圧し、排除する、権威主義と教条主義がそれである。

セントラル・マンがマージナル・マンに向かって、さげすみの眼を向け、はざかしめの言葉を吐く時、彼は、権威主義者、教条主義者であり、かりに彼が現在、一人民であつても、ひょっとして革命家であつても、潜在的な支配者、権力者の卵である。この卵を潰す手っ取り早い方法は、マージナル・マンをどしどしふやすことだ。混血児が目立ない沖繩より、混血児のめつたにいない奄美大島の方が、迫害はるかに烈しかった、という清ルミの回顧は、この方法の有効性を裏書している。

いくつもの文化を股にかけたマージナル・マンが多数派になり、一つの文化に土着し、それを墨守するセントラル・マンが少数派になる時、その時、世界の仮面は引きはがされるだろう。もともと「純粋な人種」とか「純粋な文化」とか「純粋な血」とかは、権威主義と教条主義のコンプレックスが生みだした仮構でしかないのだから。

蛇足 マージナル・マンは、体質的な混血だけをさすとおもつたら大間違いだ。もしそうおもつてこの文章を読まれた読者がいたら、あなたは体質的のみか、精神的、文化的にセントラル・マンである。精神的、文化的な混血もまた、マージナル・マンのカテゴリに入るし、この文章の照準は、びたり、精神的、文化的な純血の誇りにあてられているのだ。

『評点』特集 アナキズムと現代 その他

今月は、雑誌論文が目についたので、簡単に紹介しながら若干のコメントを付しておく。

まず、△大学人の評論誌▽をキャッチフレーズ(?)とする『評点』五月号が△アナキズムと現代▽と称する特集を組んでいる。しかし、その内容たるや、羊頭狗肉の類でなんともオソマツである。なるほどアナキズムに関連した論文が並べられてはいるが、現代とはほとんどなんの関係もない。どうやら現代はほんの付け足しのようにであり、従ってそのアナキズなるものもたいして面白からうはずはない。もちろん、アカデミズムにアカデミズム以上のものを期待しているわけではない。問題は、さしあたり、アカデミズムなりに我々にとって読むに足るものがあるかどうか、である。

白井厚△アナキズムの系譜と復権▽は、アナキズムを歴史的にひととおり概観したものであるが、従来の彼の主張のダイジェストにすぎない。判沢弘△日本アナキズムの特殊性▽は、日本アナキズムの思想および運動の欠陥ないし弱点として、(1)伝統的思想との断絶、(2)宗教的心情の排除、(3)個人的アナキズムの未成熟——の三点をあげているが、いずれも説得力に乏しい。判沢の致命的誤謬は、「ロシア革命の成功にもとづくマルクシズム勢力の勃興により、昭和に入るとともに、アナキズムは指導力を失っていったといえる」といった記述にみられるように、安易に俗説に従って、自らの眼で日本アナキズム運動史をみていないことである。その他、スターリニストの△フランスのサンディカリズム▽（佐藤清）など。要するに、わざわざ買って読むほどのものではない。

これに較べると、小松隆二△日本におけるアナキズム運動の終焉▽（『現代と思想』三号青木書店）、は、スターリニスト系の雑誌に掲載されたものであるにもかかわらず、アカデミズムからの労作であるばかりか、真に運動史と呼べる本格的論文として熟読に値する。小松は、昭和期のアナキズム運動に焦点を絞りながら、マル

新刊紹介

クス主義の古典図式で裁断したり外的要因のみによって安易に説明したりすることなく、アナキズム運動衰退の内在的要因を裏証的に追求しており、アカデミズムを超えておのずから一つの総括となっている。そこでは、アナキズムの個々反権力無支配の統一的把握が高く評価されながら、十分な現状分析を欠き、具体的な闘争プログラムを提示しえなかった理論的弱点、とりわけ労働組合論の脆弱性が厳しく批判されている。もちろん、無政府共産党の否定的評価など異論の余地はあるが、画期的論文であることは疑いない。ここでは、アナキズムの再生にふれた次の一節をイントロダクションとして引用しておこう。「かつてとはまったく状況の異なる国家独占資本主義体制のもとにあつて、その再生が過去のたんまり返してはありえないだろうということである。もしたんなるくりかえしであるなら、経済的にも社会的にも、戦前と大きく様相を変えている現世、まったく無視されるか、さもなければ再び同じ誤謬をくりかえすだけに終りかねない。」この抑制された文体をアカデミズムへの逃避と批判することはやさしいが、我々は小松論文を我々なりに返すことから始めねばなるまい。

ところで、『現代の眼』五月号逸見吉三／＼サンフランシスコ革命党と秋水／＼末尾の数行がなくなつて、尻切れトンボで終っている。その分をここへせておく。
……日本の革命運動が外国輸入のしきうつしでなく真に人民のものであるかどうかを腑分けする一つの規準は、日本の特殊性として存在する／＼天皇制／＼に、どうそれが対峙し、闘争しているかであろう。〔以下脱落部分〕まさに人民にとつての天皇制が、本性をむき出しにすると、残忍で容赦のないテロ機械であり、全能の抑圧者であることは、人間天皇を称する現代も、なお変りない。そして、いつの時代にも、そのことを敏感に受けとめ、誰よりも先頭にたつて闘つてきたのがアナキスト達であつた。その故にまた、灘波大助・朴烈・ギロチン社——と、権力の苛噴ないテロのもとで、大正期もまた天皇制への闘争の歴史は、つねにアナキストの血によつて書かれていく。（この項、向井孝『イオム通信』一〇七号による。）

言葉の危機

④

「憂国」とは？

秋山 清

どうやら、流行語らしくなりつつあるものに「憂国」がある。しかも私はこの言葉を頭から毛ざらいするものではなく、むしろ中々いい言葉だと思っている。

第一にこの言葉には私利私欲がない。私利私欲とは対立するものとして用いられてきているものであったから、憂国の情などといわれると、刃向いがたいものに思われてきた。主義や主張などというものよりも自明の「公理」のごときものとして扱われ、また押しつけられてきたようになる。そのように刃向いがたい性格を帯びて常在り、常に用いられているのだとすれば、すでにそこには私利私欲を悪むことと一体となって、わが民衆の道徳的心性の表象のごとき權威さえ生じつつある。私が、言葉の危機、の対象の一つとしてとりあげるのも、そうした現象としてかわりあっているのである。

「憂国」という映画があった。

しやれた題名だったが「憂国」ということがそこに語られているものではなかった。憂国者であると前提された男の死のことが語られていた。だからそれは憂国と題する別のものではあった。依然として、憂国とは何か、ということははっきりしていないのである。国を憂うという、その国とは何かが、はっきりしていないのである。

昔々のはなしだが、外国の港に入港してきた日本の軍艦が、日ノ丸の旗を掲げるのを見て感動きわまって涙を止め得なかったというような感想を読んだことがある。そのときの「感動」のなかにある「日本」と、戦争のために灰燼になった街が餓えていた思い出とがどう重なり得るか。「日本」でありさえすれば、どんな日本であってもそれでいいのか、憂国の対象となり得るのか。

憂国ということは、日本にとって、日本人にとって一体それはどういうことであ

るのか。

憂国という言葉がつかわれるとき、私の思う憂国と、誰かの思う憂国とはひとしいのであるか。そういうことを私は信用しない。私の憂国は国家ではなく民衆だからである。何分、国家と民衆とを不可分に考えるということが私たちの周辺にはありすぎるような気がしてならない。

戦争のとき、君のため、国のためをうたがう者はいないようであった。真実それを一つのものとして疑うことすらしない人々もいたと思う。だがその疑わない「国」の観念の中に民衆、民族の思いが秘められていたことがまず間違いないところであらう。

草莽という言葉もあった。民衆とでもいう意味であったと思うが、この観念の中には民族としての民衆というものはない。ただ野にあって、至上の権力、または権力者と直接何の関係もなく生きている人民衆たちのことである。つまり、日本というものを考えるとき、主権在民として律さるならば、憂国とは、民衆の生活を安んずるということ以外にない。私が憂国を毛ざらいしないというのは、この意味においてである。だがしきりに用いはじめた「憂国」という言葉を用いる人々の心底に置かれている「憂国」の意味は、主権在民であるのだろうか。憲法における主権在民を不屈きなものといいたがる人々が今日多く「憂国」を語っているように見える。

そこでは国と民衆との対立がもつとも考えられている。もし戦争に国が敗北したら民衆も生きている意味はないという考え方にまで到達する可能性をもった、「憂国」の思いのようである。

そういう「憂国」に私は危惧を感じるのである。本来国の中の民衆が平和に生きることが国の運営の目的であるべき憂国の考え方は、国家のために民衆は死をもつて報いなければならぬとする考え方は、「憂国」という言葉を狭んで対立しているのである。そしてこの後者を憂国の心なきものというのが、定まった観念であるかの如くである。

ちかごろ、その「憂国」が言葉として登場が繁くなってきたのは、国家が民衆を犠牲にすることを絶対視する立場からの発言の増加によるものである。

国家は至上である。民衆は国家のために一切をつくさねばならぬ。国家が安全に存立するためには民衆の生命財産が投げ出されることは民衆の義務であり、かくし

てこそ、国家は安泰である。ずいぶん昔からのいい方が、今言わず語らずに、日本のみの特別な道徳観、義務観として、強いられようとするとき、その一切は「憂国」の情に要約され、収約される。このような思考あるいは感情というものの中味は、主権在民ではない。民衆は民草でしかない思想である。国家のために民衆があるのであり、民衆のために国家が在るのではない。だから国家のために民衆の個人の生活は犠牲にされることのみが正しいこととされる。

私は、自分をこえて民族を考えたり、民衆について自分をその一個として、民衆自体の存在と運命とを考えてみることをもっとも大切に考えているが、だからそれは、民衆か、国家かではなく、民衆は国家であるのでなければならぬと思っている。もし憂国という言葉你敢えて用いるなら、「民衆が国家」という方向が「憂国」ということであらう。

戦時中、極端な差別の中にくるしんだ朝鮮人にたいする日本国家の虐政は、国家のために民衆がある、というところに立っていた。国家とは何であったのか、天皇、貴族、ブルジョア、政府、軍隊、それらのものの如くであった。日本人民衆も朝鮮人民衆もそれに仕えるために存在するものの如くでしかなかった。民衆が国を憂うとは、奴隸化する方向しか許されていなかったのである。日本人民衆がたぶらかされて朝鮮人民衆よりも上級であるかの如くに思惟したのは笑止千万この上ないことであった。

主権在民という憲法下に、朝鮮人民衆がいない跡地で、今「憂国」という主権在君主か、主権在男性か、とにかく引戻しが叫ばれて、ようやく「憂国」のはやり言葉化せんとしている。「憂国」を憂国であらしめるには民衆が国家そのものでなければならぬのである。民衆が国家であるとは、民衆の中の一政党が政治権力を奪取して、民衆を政治することでもない。

何ものにも支配されないために、民衆が国家そのものであらねばならず、民衆が国家であるためには民衆（あるいは民族）が国家に権力と支配を断念させる所にまで至らねばならない。私が「憂国」を毛ぎらいしなかったのは、「憂国」の流行の中に立って、私がそういう「憂国」を念願するということである。

見知らぬ彼方より愛をこめて

文明総批判(抄)

北大闘う集団

最近我々闘う集団(北大、工)の中から、『人類が無条件に文明を志向する限り、差別、支配を基調とする一万年に及ぶ“人類体制”から、人類は決して脱出できないのではないだろうか』と象徴的に表現されるイデオロギーが抽出され、言語化され始めました。このイデオロギーのアウトラインと問題点はおよそ次の様なものです。

一 人類は類として存続するのに“必要な労働時間”を短縮し、それと“労働可能時間”との差である“余剰時間”を獲得する事により、獣の一メンバーでしかなかった位置を脱出し、その余剰時間を用いて地球上の帝王として君臨し始めた。この段階で“必要労働時間”を直接的に或いは間接的に短縮する効果をもたらし“人間の活動力”の有形、無形一切の累積物が“文明”と呼ばれるものである。

二 天変地異、動揺極まりない自然環境で、これと云った肉体的武器を持ち合わせない人類を、類として存続せしめる武器となり、のみならず地上の帝王とならしめた文明のいわば“過去の成業”の故に、“文明志向”は漠然とはあれ、確固たる志向として人類共通のものとなった。

三 “必要労働時間”の短縮に関する極限値たる“零”は、他人に必要な労働時間を請負わせると云う“支配”によって達成され、同目的の手段としての“文明”と二重写しになり、“支配は文明の頂点”の位置を獲得してしまった。

四 一方、より一層の文明は、“個々人のより一層詳細に恒る弁別を加味した上での、より一層大規模な人間の活動力の組織化”と対応する。この過程で人類共通の文明志向は、人類の中に“活動力至上主義”とでも呼ぶべき生存の為の暗黙の前提を普及し、定着させてしまった。即ち、時代にかかわらず、最大の活動力を抽出する手段として、人類公認の唯一の生存ルートとして“職業制度”が確立されてし

まったのである。

五 暗黙の前提たる活動力至上主義、その反映としての職業制度を通じて、人間の間に差別が創出された。その結果例えば、女、子供、老人に対する冷遇が、極めて一般的なものとして普及定着し続けている。又、女子供への冷遇を当然視する事に象徴される如く、活動力至上主義は類的絶滅原理を内包していると云える。この類的絶滅原理を修補するものとして欺瞞に満ちた一切の「情愛論」が案出されている。各段階での共同体が他を不当に差別する根拠をこの「情愛論」は与えているに過ぎない。この共同体として、例えば共産圏があり、国があり、古里があり、家族があり、夫妻がある。

以上の様な論旨で『人類が無条件に文明を志向する限り、人類は差別、支配を基調とする「人類体制」を抜け出す事はできない』とのイデオロギーが抽出され始めている。我々はこの思想による闘いを文明総批判、文化大革命とスローガン化している。又以上の論旨は感性の裏にあったものを探り出したに過ぎなく、我々の中に以上のイデオロギーを注入したものは、直接的には全共闘運動の中の萌芽的思想であり、間接的には二〇世紀を含む二一世紀的諸現象であるのは云うまでもない。

全共闘この関連

「学問」「教育とは」↓文明総批判と演繹

「自己否定論」↓文化大革命の一部の表現

二一世紀的諸現象

(a) 人間を解放するはずのロシア革命が一層の活動力組織化の必要性から、国家管理社会へと変ぼう。

(b) 自己が支配される事は嫌っても、他国の人々を平気で差別、抑圧する先進諸国の圧倒的労働者群の存在。

(c) 中国における労働の意味の発見努力の大実験の続行。

(d) 文明社会に於ける公害の発生。

(e) 男への敵対を発見したウーマン・リブ。

(f) 飛行機という無機物に、地表から排斥される事を拒否する成田農民の存在。

(g) キブツ・ヒッピー等の共同体。

問題点とは次の様なものである。

① ひよっとしたら、人類は「人類」をやめない限り、差別、支配をその歴史か

ら追放し得ないのかも知れないという事。

② 唯一の「出口」は共同体の大きさにしかないかも知れない。

③ 原理的に差別、支配の追放が可能だとしても、現象的には、人類三〇億が一万年に及び獲得して来た「慣性力」を抜け出し得ないかも知れない。等々である。

さて我々闘う集団は、全共闘運動の中に何百年に一度という根源的なイデオロギーの萌芽の存在を感じつつも、殊にいわゆる地方全共闘の中には少なからぬ不十分性をも同時に読み取り、「闘う集団」という別な形態で、六九年以来の闘争北大全共闘と共に担ってきた。だが、秋期決戦により地方全共闘がのきなみに消滅してゆき、北大全共闘もその例外ではなかった。その後、ノンセクト部分の闘争体は「闘う集団」と「医学闘」しかなかったり、後者はその存立基盤を医療世界に置いた特殊なものであり、又我々が全共闘運動の萌芽的思想を多少なりともはつきりと言語化したところある状況により、各学部に関う集団は林立しつつある。そうした状況から、我々は、イデオロギー集団として、これ以上強固に、又、闘争の発展が要求する程急速に文明総批判、文化大革命の思想を緻密化してゆく作業に耐えられそうになり。一方、全共闘運動により、苔むした世界を突破し解放された多くの発らつたるインテリジェンスの中には、我々と同様な「文明に対する疑惑の思想」に到達している部分も少なからずいると思います。又、諸々の事情からして、この思想は、日本の思想界に定着し得るし、今定着しなければ、いずれは又、多くの人々により同時的に再発見される事にはなろうが、何十年も先になつてしまふかも知れない。

我々の言語化したものは極めて初歩的なものでしかないが、この種の思想の奔流を誘発する契機作りには十分役に立ち得ると思います。

編集部注 以上は闘う集団から『乱』編集部に送られた表題のパンフに添えられたレジュメである。

書評 『左翼エスエル戦闘史』

〈政治〉を超える

政治闘争を！

嵯峨潤

レーニンはナロードニキ末流が放り捨てた権力を拾い上げた、とは内村剛介のことばだが、本書の特に後半を読み進めるうちに絶えずこの、誤解を招きやすいことばが浮かんできた。わかりやすいように内村のことばにもう少し耳を傾けてみよう。

「あらゆる権力は例外なく悪であるとするトータルな権力否定は、トータルな無権力の讃美に堕しやすく、行き着くべきは破壊であるが、ロシア・インテリゲンチヤにとってはいつさいの秩序に対する忌避がほとんど生得的なのであった。そこからかれらはナロード跪拜へ、ユートピア的民衆観へと短絡していく。かくてかれらはいよいよ、賢明なナロードはみずから解放の道を見い出すといい出し、権力の受理を放棄し、ナロードを決定的に裏切っていくのである」(『われらの内なる反国家』P 287)

エス・エル(社会革命党)は十九世紀後半、ロシアのインテリゲンチヤを熱狂させたヴ・ナロード運動の流れをひいた、最もロシア的な社会主義政党であった。それは、ヴ・ナロード運動——「人民の意志」党の活動と革命家たちを紹介したクラフチンスキー『地下ロシア』(三一書房)と本書を読み比べれば一目瞭然である。

左翼エス・エルの中心的活動家であったマリア・スピリーノワの55年から59年(エス・エルの左右分裂は57年)に至る活動に焦点をあてながら、ロシア革命の一

側面を描いた本書は原題が『革命的テロリスト・スピリドノフ』となっている。従って『左翼エス・エル戦闘史』という表題にはいささか疑問が残る。しかし、左翼エス・エルの側からの刊行物が皆無であるわが国の現状では、この伝記風の文章からロシア革命の忘れ去られた側面——左翼エス・エルの政治的・思想的総括をつかみとるという過酷な読み方を自らに強いなければならない。彼らのロシア革命へのかかわり方と、その中で死に様を追うなかから、我々が何をどこまで掴んでいけるか、そして把みとったものを我々のたたかいのなかでどう生かしていくか。そういういった執拗さをもって読まないといこの種の書物は単なる「偉人伝」に終わってしまうだろう。

我々は「ロシア革命は、革命はいかに為されてはならないかを示した」とつぶやいたクロボトキンのような客観主義的立場に甘んじるつもりはないし、ヴォーリン流の「裏切り史観」も越えた地点からロシア革命に迫っていこうと思う。その為には、いつのころからか△ボルシェビキ党史▽にすり変っていた△ロシア革命史▽を我々自らの手で再構成していかなければならない。近年、エス・エル戦闘団の副隊長サヴィンコフによる『テロリスト群像』（現代思潮社）やアナルコサンディカリストの側からヴォーリン『知られざる革命』（現代思潮社）『裏切られた革命』（林書店）など、『異端』の側からのロシア革命の総括が次々と刊行され、我々の作業に重要な役割を果たしてくれるが、本書はそれらに勝るとも劣らない価値をもっている。

卒直にいうと、本書の文章は、例えばテロルの描写にしても、サヴィンコフのドラマティックな文学的手法には劣る。あるいはドイッチャーのトロツキー伝三部作のように膨大な資料を駆使した実証的な歴史書でもない。多くは、スピリドノフをはじめ、エス・エル党員の手記・手紙・談話などに語らせ、その間を比較的淡々とした著者の文章で繋ぐといった形をとっている。著者スタインベルグ自身左翼エス・エル党員であり、'17年11月の第一次連立ソヴェト政権に司法人民委員として参加した革命家である。ただ、ともすれば客観主義的ともとられかねない筆の運びは、博士号をもった弁護士であったというインテリくささのあらわれかもしれない。

前半の第Ⅰ部および第Ⅱ部は、革命前史ともいうべき'05年から'17年までの冬の時代のテロルと監獄生活が描かれている。後半の第Ⅲ部と第Ⅵ部では、'17年2月革命

とエス・エルの左右分裂にはじまり、ボルシェビキの弾圧によって崩壊して行く左翼エス・エルと病に犯されつつ投獄、追放されていくスピリドーノワの悲痛な姿の描写で終っている。

『テロリスト群像』を「社会革命党の欠陥を暴露するため」に、ソ連で出版したフェリックス・コーンは、社会革命党について次のように指摘している。

「サヴィンコフは『回想記』を、彼が属した初期の社会革命党の活動に捧げた。だからこれは一読必見の価値がある。つまり回想記は作者の意図とは別に、社会革命党が、大衆の革命への登場の時点に黒い反動を背後に隠していた、まだその「手製」の党とは化していなかった頃の、しかも個々人の英雄的行為にもかかわらず反動的になるだけの素地をすでにのぞかせていた一時期を、よく照らしだしているからである。しかし彼らがそうなるてしまうのは、社会革命党のあるメンバーたちが主観的に労働階級を真切ろうとしたためではなくて、彼らのプチブルの本質によるものである」(『テロリスト群像』序文)

我々は「サヴィンコフの意図とは別に」と書いたコーンの意図とは別に『テロリスト群像』を、エス・エルはプチブルのかどうかといった政治レベルでの読み方ではなく、テロ行為を媒介とした人間の生・死を極限まで追う彼らテロリストを、生き方―思想のレベルで読んでいく。ナロードニキとその末流であるエス・エルにとって革命とはなによりもまず人間一人ひとりの生き方の問題であった。例えばそれは『テロリスト群像』のひとつのクライマックスである「セルゲイ大公暗殺事件」に読みとれよう。セルゲイ大公めがけて投弾しようとしたカリャーエフが、馬車のなかにセルゲイ大公のほかに大公夫人とパーヴェル大公の子供たちの姿を認め、テロ行為を思いとどまった情景を想い起こしてみよう。カミユの戯曲『正義の人々』の題材となったこの事件は、単に劇的だけではなく、エス・エルの革命論の底流にかかわる重要性をもっている。後に革命の高揚のなかで他の綱領と並んで熱烈に「死刑の無条件廃止」を主張し、あるいはレーニン暗殺未遂を機に開始された赤色テロルや、農村での「徴発分遣隊」の暴挙を批判する視点は常にこのカリャーエフの行動に現われた、倫理的革命観によって支えられたものである。コーンのいう「黒い反動」が変質しゆく革命に「生き生きした革命の精神」を甦えらせようと苦闘した左翼エス・エルの行動を指すのなら、「反動的になる素地」はこのカリャー

エフの行動に確かに読みとることができる。

‘17年二月革命を機にエス・エルは生き方—思想のレベルから一挙に政治の舞台にのぼりつめていった。否、のぼりつめたというよりは押し上げられたというべきかもしれない。厳密な政治的綱領をもたぬ彼らエス・エルは政治の舞台に立った瞬間左右に分裂を余儀なくされた。しかし、左右の政治的主張がほとんどかけ離れたものになっても、形式的には十月革命後まで党は割れなかった。著者スタインベルグは「あまりに多くの絆で結ばれてきた党を割って出るのは、けっして軽々しい問題ではなかった」と回想している。また革命の指導権が、ますますボルシエビキの手に移りつつあった時期に「ボルシエビキの宣伝にみられる、生硬な唯物主義、排他的プロレタリア主義、及び煽動的な形式」に対して、「伝統的な社会革命党の高い道徳的資質と汚れなき手を維持し」たかったがためだとも説明されている。

エス・エルとはこうした、生き方、道徳など日常的意識を媒介とした「ユートピア的人民観」が、ナロードニキ以来のロシアインテリゲンチヤに特有の「ユートピア的人民観」に支えられて成り立っていた党派である。本書の前半部の大半を占める監獄生活の描写、あるいはボルシエビキとの統一線戦の挫折以後、当時の「人民」の約八割を占めていた農民に立脚してボルシエビキを批判するといった手法から、本書を著わした時点においてもこの「関係」を誇り、「ユートピア的人民観」を信じて疑わなかった著者の一貫した姿勢がうかがえる。我々はもちろん、「科学的分析」や「歴史的使命」といった便利なことばでエス・エルをあつさり「ブチブル的」と斬るわけにはいかないし、当然また、心情のレベルで左翼エス・エルに共鳴しているだけでもいけない。

テロ行為を通して人間の「人生」を根源まで問い、監獄の中で「ひとり」の人間が他人に対して何を与えることができるか」——「関係」を問いつめたエス・エルの倫理的強さを、政治権力の頂点に押し上げられたとき遂に発揮できずに終った理由のいくばくかを本書から引き出さねばならない。

左翼エス・エルは果してボルシエビキに敗けたのだろうか。

‘17年十月革命以後、11月に正式に結成された左翼エス・エルは人民委員政府に参加した。人民委員の内訳はボルシエビキ11名、左翼エス・エル7名であった。この、左翼エス・エルの政府への参加について著者は次のように述べている。

「二つの指導的政党の、そしてロシアの急進的社會主義に包摂されている二つの精神の提携を意味していた。」(傍点評者)

著者がこの連立政権を「精神の提携」と表現したことに注意を払う必要がある。スピリドノフは「10月革命勝利に続くボルシェヴィズムの勝ち誇った日々にさえ、その権威に眩惑されることを拒否していた」のであるが、左翼エス・エル第一回大会でボルシェビキを批判して「大勢の民衆が、今日ボルシェビキの背後に従っている、が、それは一時的な現象にすぎない。それは一時的なものにすぎない、何故ならばボルシェヴィキには精神生活における感化力がないからである。ボルシェビキのすべては、憎悪と遺恨に立脚している。エゴイズムに根ざしたこれらの感情は、だがしかし、組織化された労働が必要とされ、新たな生活が愛情と愛他主義の基礎の上に建設されねばならない闘争の第二段階においては、ボルシェヴィキ自らの破産として暴露されるであろう。われわれは、先駆者によって伝えられた遺産に忠実に、闘争の第二段階をこそ、常に心に刻みこんでおかねばならないのだ」と演説した。

△政治▽に△生活▽を、△政治革命▽に△社会革命▽を対置する左翼エス・エルの批判は一面ではうなずけるものをもっているがらも方法的にいえば決定的誤りを犯しているのだ。政治レベルの問題を倫理や道德の次元から批判しようとしたところで空振りに終わることは白明で、遂にボルシェビキとは同格で争うことのできなかった「ナロードニキのなれの果て」の悲劇的な姿がここにはつきりとあらわれている。

△憎悪▽、△成功▽、△権力▽に対して△愛▽を語った彼らは、ボルシェビキに敗けたのではなく、ボルシェビキと闘わなかった、あるいは闘い得なかったといふべきである。政治権力を打倒した後の△政治▽について、彼らは遂に問題意識の対象にしまった。彼らは、他の非ボルシェビキ左翼社會主義者やアナキストを含めて、不用意に権力を捨てることによってナロードを決定的に裏切って行くことになる。「裏切られた」のではなく裏切ったのであり、敗けたのではなくたたかい得なかったのだ。

(尚、左翼エス・エルやアナキストらがほとんど壊滅させられた後、他ならぬボルシェビキ内部にあって、革命の変質に抵抗した労働者反対派、デセミストのたかいかにもこの傾向はみられると思う)

左翼エス・エルにとって「精神の提携」であつたはずの統一戦線は、ドイツ軍の侵入、内乱、極度の窮乏という「鉛のような重苦しさ」の下に、プレス・トリトウスク条約をめぐつて挫折する。条約の批准を「ロシアにおいて開始された世界社会主義革命の綱領の否定」であり「世界帝国主義への降服」であると見なした左翼エス・エルは、人民委員会（ソヴェト政府）から代表をひきあげた。十月革命による政権奪取後、ロシア社会主義建設の方向を決定つける重大なヤマ場である講和条約をめぐるこの行動は、その後の左翼エス・エルの運命を暗示している。ソヴェト政府からの引きあげは「二つの型の精神」のうちボルシェビキ型「精神」の独裁を意味していた。その後の「ボルシェビキに反省を促す」ためのモスクワ蜂起は惨めである。スピリドノフは後に「モスクワ蜂起は権力奪取の視点が欠落していた」と自己批判しているが、本書でも同様な総括がごく簡単に述べられている。とはいつても、これはあくまでも結果論であり、「政府諸機構を掌握することには関心を持たず、ソヴェトの政策の根本的転換をもたらず」ことを夢みていた政治に対する「甘さ」はおおむねよくない。

モスクワ蜂起に次ぐエス・エル党員ドーラ・カブランの衝動的なレーニン暗殺未遂事件以後の弾圧は容赦ないもので、ツァーリ体制下の厳しい弾圧の下で耐え抜いてきたエス・エルも、ボルシェビキ政権下では短期間に壊滅させられていく。エスエルの崩壊と、ますます重くなるスピリドノフの病気は、妙に重なりあつて悲愴である。

トータルな権力否定が、トータルな無権力の讃美に墮し、左翼エス・エルは破滅した。△政治▽を忌避する者は決して△政治▽を超えない。左翼エス・エルの反政治的問題意識が我々の胸をうつものであればこそ、我々は反政治としての政治闘争を指さねばならない。

キス・ム・ニコリス・ム
リス・タ・リ・ン・主義・マナ
モスクワ蜂起

麦社 連続講座

反スターリン主義・アナ
キズム・ニヒリズム

5・28 (金) 内村 剛介
6・1 (火) 秋山 清
6・2 (水) 笹本 雅敬

整理券／五百円（三日間通し）各夜六時半より／定員制につき、麦社まで申込んで下さい。（折返し、整理券をお送りします。詳細は麦社まで）

編集後記

麦社宛に八三里塚・沖繩を闘う七〇年代戦線〃の会員になっていただけませんか〃という呼びかけが送られてきた。入会申込書とおぼしきところに、住所氏名等の項目と並んで「選挙活動（貴殿の出来ることを）〇でかこんで下さい」とある。なんのことはない。タカミの選挙運動Ⅱ後援会作りなのだ。奇怪なことは、「三里塚・沖繩を闘う」ためになんでタカミの選挙運動をやらなければならぬのか、説明らしい説明がないことである。フザケルのもいいかげんにしたまえ。はつきり言っておくが、こんな偽物的な選挙運動は三里塚・沖繩に対する冒瀆以外のなにものでもないのだ。

乱 RAN 4号

1971年4月20日発行（月刊）

定価 70円（〒25円）
定期購読 6号分 500円（〒共）
編集 『乱』編集委員会
発行者 秋山 清
発行所 麦社

東京都豊島区南池袋1-15-21田中ビル207
tel. (03)987-5765 振替東京 144722

乱

RAN

バックナンバー

1号

- △アナキズム神話▽をどう超えるか……………藤川健郎
アナキスト官僚性の育成!?……………江口幹
言葉の危惧①「土着」ということ……………秋山清
ある模索——「乱流」グループ中間総括……………嵯峨潤
地の塩としての生涯——山鹿泰治さんのこと——
……………大沢正道
わが国における反逆の原点(1)……………鳥越弘之

2号

- 観念としての△階級闘争▽からの袂別……………西田弘和
闘いつつ進むIWT——IWT参加のよびかけ——
企業別組合における職場集団……………柚木峻
言葉の危惧②反権力……………秋山清
『われらの内なる反国家』によせて……………沢木漠
わが国における反逆の原点(2)……………鳥越弘之

3号

- △市民▽の視角とアナキズム……………高島通敏
現代技術と連合主義……………ダニエル・ゲラン
討論資料 我々の状況と革命の戦略
言葉の危惧③少数決……………秋山清
わが国における反逆の原点(3)……………鳥越弘之

定価各七〇円(二二五円) 申込は、麦社『乱』編集委へ、定期
購読は「何号から」と明記して下さい。

全体革命への序説

一五〇円
（〒35円）

大沢正道

「アナキズムの原理と原則」「プロレタリア独裁と連合主義」の二論文を収録。研究会テキスト等に好適の入門書。

研究会等で十部以上まとめて申込みの場合、割引あり

アナキストの文学

二四〇円
（〒45円）

秋山 清

「アナキストの文学とアナキズムの文学」、「アナキストの文学」、「昭和の詩人群」からなる本書は多年にわたりアナキスト詩人として活躍してきた著者の総括ともいえよう。

私の見た

日本アナキズム運動史

増補版

近藤憲二

五月刊行 予価三〇〇円（〒45円）

大杉の片腕として活躍した著者が体験をもつて語る日本アナキズム運動史。基本資料としても高く評価される。再版にあたり、新たに秋山清氏の解説を加えた。

クロンシュタットの反乱

独裁と革命

ベルクマン

残部僅少
二〇〇円
（〒35円）

ファブリ

残部僅少
二〇〇円
（〒35円）

麦 社

東京都豊島区南池袋1—15—21 田中ビル207
振替口座 東京 144722 tel (03) 987—5765